

第210話 口誦文芸② 「替女説地震身上」 その2 中山町歴史散策

「替女説地震身上」は、長文にわたるので、中略、後略で、一部を抜粋して掲載します。

天地ひらけて不思議をいわば、いわば近江の湖敦賀の富士は、ただ一夜に出来たと聞き聞き、夫、見もせぬ昔の事よ、

ここに不思議、越後の地震、言うも語るも身の毛がよだつ、年は文政十一年、時、霜月中の二日朝の五ツと覚し頃に、どんとゆりくる地震のさわぎ、荻一ぶく落さぬ内に、上、長岡新潟かけて、中に三条今町見附潰す跡から一時のけむり、それに続いて与板や燕、在の村々其数知れず、つぶす家数、幾千万を梁や棟柱や桁に肩骨、肩腰頭打たれ、目鼻口より血吐きながら、逃れ出んと狂気の如く、もがき苦しむ終いたえ果てる、手負死人、書尽されず、数も限りも有増ばかり、親、子捨て、親を捨て、あかぬ夫婦の中をも言わず、捨てて逃げ行く其行先、ほのほもへだつ大地、割れて、砂吹き出し水もみ上げて、行くに行かれぬたすむ内に、風ははげしく後、見れハ、火の子吹立火花かむり、熱や切なや苦しや怖わや、中にこもれハ手足を挟み、肉をひしがれ骨打ひしぎ、泣きつ叫びつ助けでくれよ、呼べど叫べど逃がる人、命大事と見向きもやらす、覚悟くとよすりながら、西よ東よ南よ北よ、思い思いに逃行く声、げにやきゅうかん大叫喚の、責も是にハよもまさらじと、見るもながく骨身に通る、今、この世が滅びてしま、弥勒出世の世とならん。又ハ奈落に沈みもするか、言つも愚かや語るも涙、急に祈禱湯の衣様と、切な念仏唱えてみても、何の印もあら恐ろしや、(略)

次号に続く

※引用 中山町史 中巻 第10章第3節 文芸と美術工藝

私たち地域おこし協力隊です! No.76



新年おめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いします。

昨年11月末に栃木県から家族が中山町に遊びに来ました。山形県の美味しいものを食卓に並べて、色々な食文化を知ってもらいました。私自身が中山町に移住して初めて知った海藻でできている寒天のような「恵胡」。特別な日に食べる郷土料理ですね。辛子酢味噌で食しました。初めての食感に関心を持っていました。それから絶対食べたいと要望があった『山形牛』で焼肉をしました。タレをどうするかいろいろと悩みましたが手持ちのこだわりの『塩』で肉の旨味を引き出し最高に美味しく食すことができました。そして1番の人気だったのが味付きいなりの中に餅が入っている『餅いなり』でした! ちょっと意外だったわ〜。

町内のお菓子屋さんの焼菓子や飲食店の一品料理をテイクアウトしたりし、たくさんの中山町の味を知ってもらえたと思います。温泉に入ったり本当に楽しいひと時でした。季節を変えてまた訪れたいと言ってもらえ嬉しかったです。日頃から『〇っと活動』にていろいろと中山町のことを教えてくださる皆様のおかげです。中山町に貢献できるように活動していきたいと思ひます。



阿部美恵子

出身地：栃木県鹿沼市  
趣味：高校野球観戦

●協力隊への問い合わせ先● 阿部 ☎662-4271 (総合政策課)